

コリント人への手紙第二 第4章 18節

「私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。」

久しぶりに都心へ向かった。まばらな乗客の間から林立する高層ビル群が見える。高さが中低ほどのビル群には華やかな看板があり、夕刻になればネオンサインが煌めく。それだけでおさまらず、音楽が流れ、誘いのアナウンスが街を駆け巡る。目が休む間が無いほど、あらゆる手立てで見せ、購買欲をそそる。

見て楽しみ、聞いてウキウキする通りも夜中になると静まり、感染症が蔓延すると、見えていたものがすっかり消えてしまう。あの賑わいはどこに、と行き場所を聞きたくなるほど街がひっそりとしている。ひっそりした街の背後には、日々の生活に困窮している者たちが見える。いずれにしても、見えるものは一時のことである。

ところが、見えないものにこそ目を留めるよう勧める。見えないものはいつまでも続くからだ。見えないものに目を留めるとはどのようなことを指しているのだろうか。それは、信じることではないだろうか。こころの目で見ることではないだろうか。主を信じることである。